

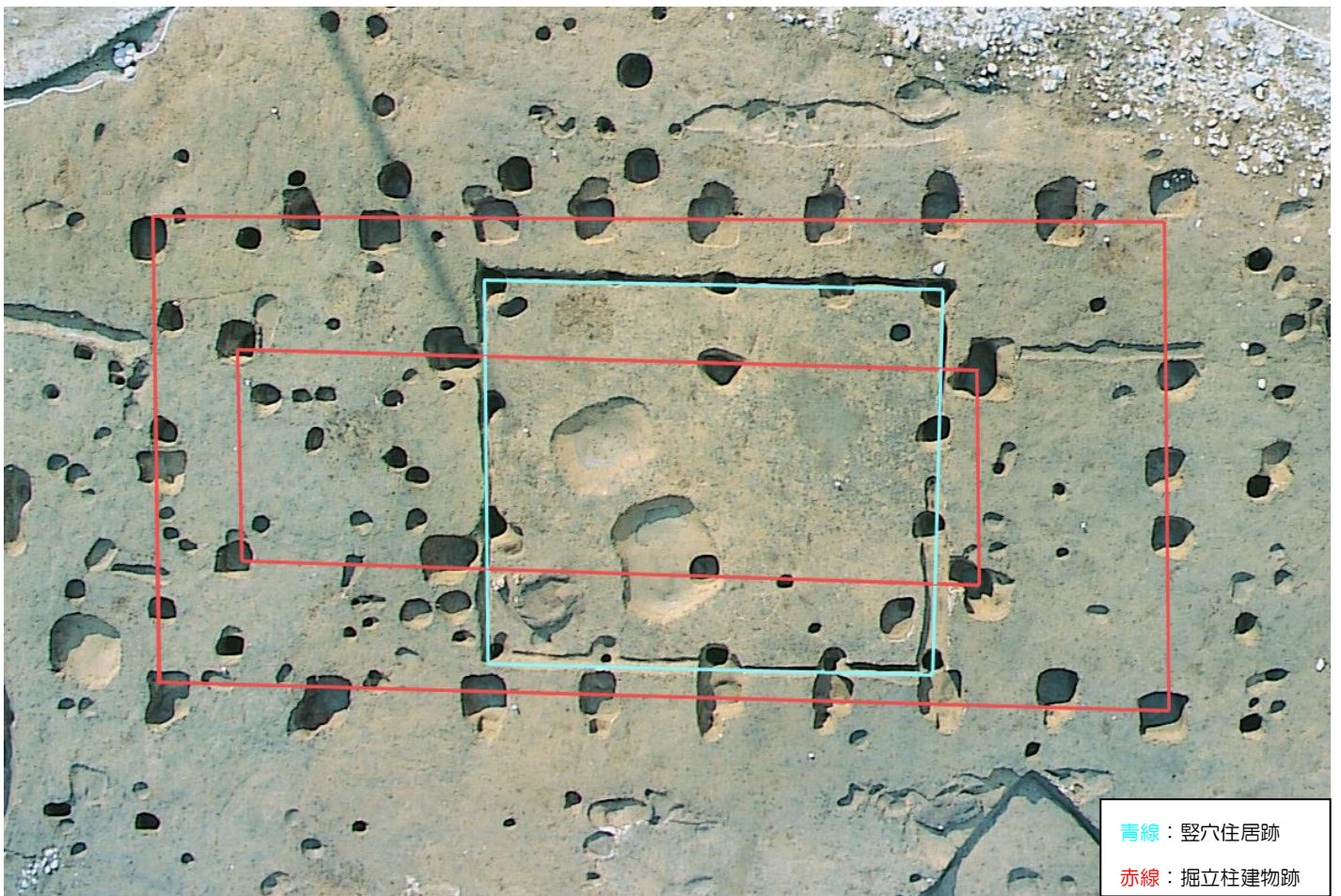
下新庄アラチ遺跡・上林新庄遺跡

下新庄アラチ遺跡・上林新庄遺跡は1990年～1996年（平成2～8）にわたって発掘調査が行われ、古墳時代後期から奈良・平安時代（7世紀初頭～9世紀末）の集落の営みが確認されています。

下新庄アラチ遺跡では^{たてあなじゅうきょ}竪穴住居48棟、^{ほったてばしらたても}掘立柱建物54棟が見つかりました。同時期では大型建物を中核として、主屋または副屋建物10棟、倉庫施設4～5棟で構成されたと考えられ、奈良時代後半（8世紀後半）には竪穴住居が掘立柱建物へと変わる大きな転換期があります。遺物は、^{す え き つ き}須恵器坏など生活容器の土器が多く出土していますが、役所関係や寺院の遺跡で認められる^{えんめんけん}円面硯や^{りょう}仏具の^{わん}稜碗も見つかっています。円面硯は文字に通じた人物の存在を裏付け、木簡などに記録を残す役割を担っていました。稜碗は金属を写した仏器の一種で、当時この地に仏教が浸透していたことを示します。

下新庄アラチ遺跡の南隣に位置する上林新庄遺跡からも同時期の大型掘立柱建物や仏器である^{てっぱつ}鉄鉢が発見され、仏教関係の施設が存在した可能性があります。

このように、両遺跡は一般的な集落遺跡には見られない規模の大きな建物と出土遺物から、古代の^{はやしごう}拝師郷をまとめていた郷長級の居住地であった可能性が指摘されています。



竪穴住居から掘立柱に造り替えられた建物跡 上空より 1996年（平成8）
（下新庄アラチ遺跡）



発掘調査風景 北より 1994年（平成6）
（下新庄アラチ遺跡）